
ひぐらしのなく頃に 異端の刑事

チルノ・トレバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 異端の刑事

【Nコード】

N9524Z

【作者名】

チルノ・トレバー

【あらすじ】

ある事件で独断で発砲し、武装犯を射殺した警部補・坂戸宮時雨。新たに興宮に赴任した彼女の存在は、雛見沢の運命にどのような影響を及ぼすのか……

丸木銀行立て籠り事件（前書き）

また新しく書き直した……
だが後悔はしてない。

丸木銀行立て籠り事件

昭和53年 3月24日 午後4時26分 東京某所

数人の武装した男達が丸木銀行に押し入り、職員を人質に立て籠る事件が発生した。

これを聞いた警察は機動隊を出動、銀行を包囲し、説得を試みる。

そして付近の建物の屋上では、特殊銃隊が犯人に狙いを定めていた。

「射撃許可はまだか？」

屋上で寝そべり、スナイパーライフルを構えている女性が苛立ちながら、

近くに居る部下に尋ねる。

「まだありません。どうやら本部は説得を試みるようです」

それを聞いて彼女、坂戸宮時雨は舌打ちする。

既に犯人を照準に捉えており、許可があればすぐにでも射撃可能な状態だった。

今回立て籠っている男達はどれも凶悪犯で、

今まで多くの命を奪ってきた。

そんな連中が相手なのだ、人質の一人や二人簡単に殺すだろう。

一刻も早く制圧しなければ、人質の命が危うかった。にも関わらず、本部から射撃許可が降りない上に武装犯に説得を試みると言う。

その本部の危機感の無い対応が元々、それほど気が長い方ではない彼女を苛立たせていた。

「撃たないでくださいよ？隊長」

「分かってらあ」

スコープを覗きながら、彼女はそう返事を返す。結局その後も射撃許可は降りず、本部による説得が続けられた。

それから約一時間が経った。

時間が経つにつれて、武装犯達の顔から余裕が消え焦りが浮かんでくる。

説得にも耳を貸さなくなり、人質に暴力を振るうようになる。そして

「あの野郎……撃ちやがった!!」

時雨の顔が怒りに染まる。

遂に武装犯の一人が近くに座っていた警備員を撃ってしまった。

幸い、急所は外れていて命に別状はないが、このままでは人質の命は無いだろ。

「射撃許可はまだ出ないのか!！」

「駄目です、特殊銃隊は待機せよの一点張りのままです!！」

「この状況でまだ説得するってのか? 何処まで危機感がねえんだよ、本部は!！」

おい、指揮を取ってるのは誰だ!！」

「太宰警部です」

「太宰いいい!?! あんのエロオヤジが!！」

時雨と機動隊を指揮している太宰長久警部は旧知の仲だった。最も友人と呼べるような穏やかな関係などではないのだが。

機動隊に配属されてから直ぐに太宰からセクハラされ、

それに激怒した時雨が太宰を三ヶ月間入院する

ほどの大怪我を負わせていた。

その後、太宰の傷は完治するも、当然自分を病院送りにした

時雨にいい印象があるわけがなく、事あるごとに

時雨に無理難題を押し付けていた。

何時まで経っても射撃許可を降りないのは、時雨に手柄を取られるのが

気に入らない太宰の嫌がらせだろう。

それが分かっている時雨はさらに苛立ちを募っていき

「……もういい」

怒りは頂点に達した。

「は？」

「撃つ」

時雨は躊躇うことなく引き金を引いた

TIPS 報告書(前書き)

TIPS書いてみた。

次から興宮へ行きます。

TIPS 報告書

丸木銀行立て籠り事件の報告書

概要

昭和53年 3月24日 午後4時26分

丸木銀行にて立て籠り事件が発生、太宰警部の指揮の元
機動隊による包囲、説得が行われた。

だが、犯人は説得に応じず、人質の一人を銃撃し負傷させる。

その直後、特殊銃隊の小隊長である坂戸宮時雨警部補が
独断で発砲、武装犯二名を射殺した。

その後、機動隊の突入により、残りの武装犯も全員逮捕される。

被害

機動隊 特に無し。

人質 警備員一人が銃撃により負傷、命に別状なし

武装犯 二名射殺、残りは全員逮捕。

坂戸宮警部補の処遇

事件解決後、坂戸宮警部補の身柄を確保、
事情聴取を行う。

坂戸宮警部補は事情聴取で「あのままでは人質の命が危うかったため、発砲した」と語っているが、太宰警部は他に何か意図があったと見ており、更に追求する予定。

以上で報告を終わらせてもらいます。

3月25日 伊崎正人 巡查部長

異動(前書き)

今回も短いぜ!

異動

俺はバスに揺られながら資料に目を通していた。

武装犯を射殺した俺は事情聴取を受け、自宅謹慎を言い渡された。そして数日後、俺は特殊銃隊を除隊され、

興宮署へと異動を命じられた。

本来なら懲戒免職のはずの俺が、何故これほど軽い罰で済んだのか？

正直、今でも分かっていない。

だが、わざわざ罰を軽くしてくれたんだ。ありがたく異動させてもらうことにして、

俺は直ぐに興宮へ向かった。

『興宮へ興宮へお降りの方は』

アナウンスが興宮へ到着したことを告げる。

回想に耽っている間に目的地に着いたようだ。

俺は資料をトランクに仕舞い、バスから降りる。

降りて直ぐに、愛用のジッポライターで口にくわえた煙草に

火をつけ、ゆっくりと煙を吐き出し、興宮書へ向かって歩きだした。

「本日付で興宮署に異動になりました。坂戸宮時雨です。」

俺は署長に異動の挨拶をしに来ていた。

「署長の川内です。噂には聞いてますよ。なんでも全日本都道府
県警射撃大会で

二年連続で一位を取ったとか」

「まあ……はい」

「それに、君はその若さで特殊銃隊の小隊長を務めていたとも聞
く。

「いやあ、君のような優秀な人物が来てくれて、私は本当に嬉しい
よ」

「はあ……」

その後も暫く署長に褒めちぎられ続け、
署長室から出ることができたのはそれから一時間後のことだった

「やれやれ……」

ようやく署長室から出ることができた俺は、近くのソファアームにド
ッカリと座る。

そして胸ポケットから煙草箱を取り出し、煙草を吸おうとするが

……

「空っぽか」

箱の中には一本も煙草は入っておらず、溜息をつきながら箱を握りつぶす。

取り敢えず煙草でも買いに行くかな。そんなことを考えていると

「吸います？」

煙草箱を差し出された。

前を見るとそこには大柄な男が立っていた。

「それじゃ一本」

箱から一本抜き取り、口にくわえて火をつける。

それを見た大男は俺の隣に座り、同じように煙草を吸い始める。暫しの間互いに無言で紫煙を燻らせる。

大男が話してきた。

「あなた、この人間じゃないですよね？」

新しく来た人ですか？」

「ああ、本日付で興宮署に異動になった、坂戸宮時雨だ。よろしく」

「こりゃご丁寧に。私はここで刑事やってます。

大石蔵人です。気軽に蔵ちゃんとも呼んでください。

んっふっふっふ」

「流石にそれは無理があるぞ……大石さんで勘弁してくれ。

ああ、俺のことは時雨でいいからな」

「そうですね。ではお言葉に甘えしよつかねえ」

そう言って大石さんは大きく煙を吐き出した。

TIPS 歓迎会（前書き）

次から暇潰し編に入るぜ！

TIPS 歓迎会

「ここか？」

「ええそうです。さっ入りましょう」

俺の質問に大石さんはそう答え、中に入っていく。
これから歓迎会があると言って、ここまで連れてこられたんだが

……

「雀荘じゃねえか……」

連れてこられたのは雀荘だった。

これから起きることが簡単に想像でき、溜息をつきながら
大石さんの後に続いた。

雀荘に入ると、中年の男がこちらに向かって手を振った。

「蔵ちゃんこっちこっち！」

「なっはっはっは、サトさん久しぶりです！」

大石さんが中年の男と親しげに話し始める。

「それでその人？新しく入った人って」

「ええ、今日こっちに来たばかりの」

「初めまして、坂戸宮時雨です」

「俺は佐藤、情報屋をやってる。サトさんとも呼んでくれ」

「じゃあ俺のことも時雨で」

「それじゃ時雨ちゃんって呼ばせてもらおうよ」

そう言っつてサトさんは笑う。

それを見て、さつきもこんなやりとりをしたことを思い出し、笑みがこぼれた。

その後ダム現場監督であるおやつさんが来て、四人で麻雀をすることになった。

俺を金づるにしていかがわしい店に行こうとしてるみたいだ。上等だ……俺を舐めたこと後悔させてやるよ。

「……時雨ちゃん？あんだ、何か雰囲気変わってませんか？」

「気のせいだ。……ああ、そうだ。もし俺が勝ったら、てめえらの財布が空になるまで酒奢ってもらおうか」

「いいですよ。最も勝てたらですけどね。んっふっふっふっ！」

「そこまで言っつてことは自信があるんだろうな？」

「軽く終わらせて、バニーちゃんの所に行かせてもらおうかな」
俺の言葉に三人は不敵な笑みを浮かべながら、
口々にそう語る。
自分の腕前に自信があるんだろう。
俺は彼らに向かって獰猛な笑べる。
そして

「さあて……始めようじゃねえか」

俺のこの言葉で激闘の火蓋が切って落とされた

「ちつくしよおおおお!!」

「私、今月敵しいんですけどねえ……」

「こいつ元プロ雀士とかじゃねえだろうな？」

俺の目の前には無様に打ち拉がれる男が三人。
結果は俺の圧勝だった。

「やて……」

男共の方がビクリと震える。

……情けない連中だ。

「奢ってもらおうか？有り金全部で」

満面の笑みで死刑宣告を告げる。

俺の言葉を聞いた瞬間、男共の絶叫が木霊した。

その後、俺達はいろいろな店を周り、文字道理無一文になるまで男共に酒を奢らせ、俺は満足してホテルに帰っていった。

興宮署到着（前書き）

暇潰しに入ったよ

興宮署到着

昭和53年6月13日

犬飼建設大臣の孫、犬飼寿樹が何者かに誘拐されるという事件が発生した。

この事件は警視庁公安部しか知れておらず、公安部は全職員を招集、極秘に調査を開始する。

職員達が各方面に調査を始める中、新米刑事の赤坂衛は鬼ヶ淵死守同盟の調査を命じられる。

そして赤坂は県警本部からの紹介を受け、興宮署に来ていた。

「こんな部屋で申し訳ありませんね。応接室を抑えてあったんですが、

突然議員が居らして追い出されてしまいました」

そう言って本田屋氏は笑う。

私達が今居るこの部屋は会議室とはとても

呼べるものではなかった。

着替えロッカーが並び、近くのソファーでは新聞紙で顔を隠し寝ている者も居る。

胸にかなり立派な膨らみがあるから、女性だろう。

だが、今はまだ勤務時間中のはずだ。

彼女はこんな場所で寝ていていいのだろうか？

「ああ、またか……時雨ちゃん、時雨ちゃん!」

本田屋氏が寝ている人物を揺すって起こそうとする。

「う……ん……」

だが女性はわずかに唸っただけだった。

「時雨ちゃん起きなっ!こんなところで寝てるよ、またシゲちゃんにどやされるよ!」

「……分かった、起きるよ」

本田屋氏の言葉に女性は渋々体を起こす。

「それでこいつ誰?新入り?」

「……警視庁から来ました、赤坂衛です。」

鬼ヶ淵死守同盟について調査するためにここへ訪れました」

いきなりこいつ呼ばわりされ、少しムツとするもそれを抑えて自己紹介を行う。

「警視庁……ねえ」

そう言いながら、女性はこちらを探るようはこちらを見てくる。

「そこまでしておきなっ……ああ、紹介がまだでしたね。彼女は

坂戸宮時雨ちゃん。ここに勤めている刑事です」

「坂戸宮時雨……？確か、全日本都道府県警射撃大会で二年連続で一位を取った機動隊員の方ですよね？」

「正確には警視庁第六機動隊所属、特殊銃隊第二小队小隊長だけだな」

彼女は噓んでしまいそんな自分の所属を、こともなさに言い切る。

「まあ最も今はただの刑事なんだがな」

そう言っただけ彼女は肩をすくめる。

そう言えば、彼女は確か将来を嘱望されていたはず。

その彼女が何故このような田舎町に居るのだろうか？

そこまで考えてある事件を思い出す。

“丸木銀行立て籠り事件”

武装した数人の男達が銀行に押し入り、職員達を人質に立て籠った事件だ。

一時は膠着状態に陥ったが、犯人が人質に向かって発砲したことにより

事態は急展開を迎える。

人質の命が危険だと感じた一人の機動隊員が独断で発砲し、犯人の内二人を射殺した。

それに合わせて機動隊が突入、残りの犯人も確保されて事件は幕を閉じた。

もしかして彼女がそんなのか？

「さて、話の邪魔になりそうだから俺はそろそろ

失礼するよ」

本田屋氏と話していた坂戸宮氏が立ち上がり、会議室から出ようとする。

「おっと」

だが、直ぐによろけて壁に手をつく。

よく見れば顔色が悪い、何か病を患っているのだろうか？

「時雨ちゃん、なんだか調子悪そうだね？

風邪かい？」

「いや……単なる二日酔いだ」

「へえ……時雨ちゃんが二日酔いになるの始めて見るよ」

「何時もはならないんだがな。……チツ、何か悪いことが起きなきゃいいんだが……」

坂戸宮氏はふらつく足取りで会議室から出ていった。

その後、本田屋氏から鬼ヶ淵死守同盟の簡単な説明を受けたが、私は先程の言葉が何故か頭から離れなかった

雑見沢案内（前書き）

何時までこのペースで投稿できるか？

難見沢案内

「時雨ちゃん。ちょっといいですか？」

自分のデスクに突っ伏し、眠っていた俺は大石さんの声で目を覚ます。
それと同時に頭が痛み、顔を顰める。

「……何だよ」

「おやあ？ 顔色がよくないですねえ。風邪ですか？」

「それ、さつき本田屋さんにも言われたぞ。……二日酔いだよ」

「おや、それは珍しい。てっきりあなたは二日酔いなんてならない人だと思ってましたよ」

「あんたは俺をなんだと思ってるんだ？
俺だつて酒に酔うことぐらいはあるぞ」

「私たち三人の有り金全部酒代にして、
一夜で店の酒全部飲み尽くしたあなたが言ったところで
全く説得力ありませんよ。んっふっふっふ」

「あのな……そもそもあれは、あんたらが俺に負けたからだろう
が……！」

そうして何時ものように話していると、先程の刑事……赤坂が呆気にとられた表情で、こちらを見ていることに気がついた。

「それで、結局無駄話をしにきたのか？」

「あーっと用件をすっかり忘れてました。

赤坂さんちよっこつちに来てもらえます？」

大石さんに呼ばれ、赤坂がやって来た。

「どうも坂戸宮さんさつきぶりですね」

赤坂は軽く頭を下げてくる。

「おやぁ知り合いですか？」

「まぁ少しな」

「そうですね……まぁちようどいいかもしれませんね」

「丁度良い？」

大石さんの言葉に首をかしげる。

赤坂にも関係あることなのか？

「実はこれから彼に離見沢を案内してあげようと思ひまして。時雨ちゃんにも同行して欲しいんですよ」

「勘弁してくれよ……本当は今直ぐにでも早退したいんだぜ？」

実際今でも頭痛と吐き気でかなり辛い。
出来れば乗り物なんかには乗りたくない。

「そこを何とか、お願いできませんかねえ。
今度一杯奢りますから」

「はあ……分かったよ。その代わり案内は大石さんがしてくれよ。
俺は座席に座ってるだけだからな」

「ええ、それで構いません。では行きましょう」

俺達は雛見沢に行くため、車に向かった。

今俺達は雛見沢に向かって車を走らせている。

大石さんが運転し、助手席には赤坂が座り、
後部座席には俺が座っていた。

突然だが、問題が俺に起きていた。

雛見沢へと続く道路は途中から舗装されていない砂利道へと切り
替わる。

当然車の揺れは大きくなる。

つまり……

「ぎもぢわるい」

車の揺れが俺の二日酔いをさらに悪化させていた。

「坂戸宮さん大丈夫ですか？」

「無理……吐く……」

心配そうに俺に声を掛けてくれた赤坂にそう声を返した瞬間、車が急停止し俺は助手席に額をぶつける。

「あつちやく参ったな……」

大石さんがクラクションを鳴らす。

「あんた達、駄目だよこんなところで道塞いじゃ！」

ぶつけた額をさすりながら前を見ると人相の悪い男達がバリケードを作り、道を塞いでいた。

「こいつら……赤坂、これで顔隠しとけ」

赤坂に野球帽とマスクとサングラスを投げ渡す。

「急にどうしたんですか？」

「いいから早くしろ」

俺に促されて、赤坂は素顔を隠す。

この男達は園崎組の構成員で鬼ヶ淵死守同盟の過激派である。バリケードで道を塞いでいるのは、山へ不法投棄をしに来るトラックを雛見沢に入れないためだと語っているが、実際はダム工事を使う重機に対する嫌がらせのためであり、山へ不法投棄は住民自らが行なっていることだった。

(こっちはただでさえ二日酔いでいらついでるついでるのに……)

大石さんが退くように促すが、男達達は一向に退く気配がない。

「おい」

「へっ？うわっ!？」

何時までも動かない男達に苛立った俺は、

近くに居た男の胸倉を掴み、互いの鼻がぶつかりそうになるぐらいまで引き寄せる。

「とつとと道開けやがれ……それとも全員しよっぴかれてえか？」

「わっわかりましたよ、今道開けますから!！」

俺に凄まれた男は顔を真っ青にして、道を開けるように指示する。
バリケードは退けられ車は奥に進む。

「時雨ちゃん。今回はずいぶんと荒っぽいですねえ。」

どうしたんです？何時もはもつと穏便に済すじゃありませんか」

「こちとら二日酔いでただでさえいらついでるついでるのに、
バリケード何かで道塞ぎやがったから余計に腹が立ちましたただ
けだ。」

……本当なら全員ボロボロにした

拳句、車で署まで引きずっていきたくらいなんだぞ？

それをアレで済ましてやったんだ。

むしろ感謝しやがれってんだ」

「なっはっはっは！怖いすねえ」
あなたが同僚でよかったですよ」

俺の言葉に暫しの間、大石さんが愉快そうに笑い続けた。

その後俺達は御三家である公由・古手・園崎の本家を案内し、赤坂の本当の目的である犬飼建設大臣の孫、犬飼寿樹の搜索の協力を約束して解散となった。だが赤坂が先走り、無茶しないかが気にかかった。

雀荘にて（前書き）

そろそろ小此木の出番だ！！

雀荘にて

「
」

赤坂に雛見沢を案内した次の日。

非番だった俺は自宅で銃の整備をしていた。

銃器マニアである俺の家には様々な銃器が揃っており、非番の日には銃の整備をして一日を過ごすことが多かった。上機嫌で銃を磨いていると、電話のコールが鳴った。

「はい、もしもし」

至福の時を邪魔されたことにより若干腹が立ったが、待たせるわけにもいかないから電話に出る。

『時雨ちゃんですか？どうも大石です』

「大石さん？珍しいな家に電話してくるなんて」

『おや、そうでしたか？それじゃこれからは』

毎日電話させてもらいますよ。んっふっふっふっ！』

「いや、流石にそれは遠慮する」

『なっはっはっは！それは残念です』

その後、雀荘に来てくれと言われ俺は私服に着替え雀荘に向かった。

「あれ、おやつさん今日は早いですね？」

「おう、時雨か。今日は早くに片付いてな、特に用事もなかったからそのままここに来たんだよ」

俺が雀荘を訪れると、既におやつさんが来ていた。

「吸います？」

おやつさんに煙草箱を差し出す。

「お、悪いな！」

おやつさんは笑顔で煙草箱から一本抜き取り、煙草を吸い始める。

「現場の方はどうです？」

「毎日毎日ダム工事反対だのいわれるわ、お経唱えられるわ……たくつ頭がおかしくなっちまいそうだぜ」

おやつさんは苦々しい表情で煙を吐く。

ダム現場事務所に対する妨害行動はかなり苛烈な物だった。初期の方は事務所に対する投石や重機破壊等直接的な物だったが、警備を厳重にしたことにより、拡声器でダム反対を叫んだり、大音量でお経唱えるなど間接的な物に変わった。

おかげで事務所の近くを通るとあまりの大音量で耳栓をつけても耳がおかしくなりそうになる。

「……すみません」

俺は申し訳なさに頭を下げる。

「なんでお前が謝るんだよ？」

「本当なら村人の行動は、俺達を取り締まわなければならないんです。」

それなのに……」

俺が密かに悩んでいることだった。

警察は一般市民の味方……なんて言われてはいるが、実際は法律だの何だのと味方することが出来る人々はかなり限られるし、最も優先されるのは政治家だった。

ましてや相手は味方すべき市民だ。

普段は仕事だからと自分を正当化し、彼等を取り締まる。

だが一人になると、どうしても考えてしまうのだ。

俺がやっていることは正しいことではないのではないか？と

「仕方ねえだろ、お前らが悪いわけじゃない。」

蔵人も言ってただろ？警察には強いところと弱いところがあるってな」

「……」

「そう気負うなよ。お前は自分のできることを精一杯やって、そのやったことを誇ればいい」

「……はい」

「それに、お前がそんなにしおらしくなると鳥肌が立つちまう」

「なっ！おやつさん！！」

おやつさんが声を上げて笑う。

最初は膨れていた俺もつられて笑ってしまふ。

俺が悩んでいたことは大したことじゃないのかもしれない。

おやつさんが笑い飛ばしてくれたおかげで、

少しだけ気が楽になった。

その後サトさんが酒を持って現れ、三人で一杯やっているとき、大石さんが赤坂を連れて現れた。

「遅くなつてすみません。赤坂さんがお寝坊しちゃいまして。んっふっふっふっ」

「遅いぜ大石さん。こっちはもう始めちまってるよ」

俺はビール缶を掲げて笑う。

「坂戸宮さん勤務中に飲酒などとしては……」

「ま〜ま〜！細かいことは気にすんなよ。

ほれ、こっち来い！！」

「そうそう！パーと行こうぜ、パーっと！！」

「蔵人も坊主も早くこっちに来い！一緒に一杯野郎じゃねえか、なあ？」

「ハッハッハッハッ！」

三人で上機嫌に笑う。

俺を窘めようとした赤坂は、完全に出来上がっている俺達を見て言葉を失ったのかそれ以上何も言うことは無かった。

大石さん達を交えて軽く一杯やった後、

おやつさんが麻雀をやるうと言いだした。

それ聞いた瞬間、大石さんが黒い笑みを浮かべる。

……どうやら、赤坂を食物にしていかがわしい店に行こうとしてるみたいだ。

事前に他の二人にも伝えてあったらしく、おやつさん達もそれぞれ後のことを考えてだらしなく顔を緩ませていた。

赤坂は周りの変化についていけないのか、不安そうな表情をしている。

だが僅かに口元が歪んでいた。

結果が見えた俺は、酒を買って来ると

大石さんに言いつて雀荘から出る。

空を見上げると、月が地面を照らしていた。

「あの勝負、赤坂の勝ちだな」

俺は忍び笑いしながら、酒を買いに向かう。

その後、酒を買って帰ると中年三人組がうなだれ、

赤坂がどこかスッキリした顔を浮かべていた。

高津戸へ(前書き)

梨花と羽入が出てきた!!
本当は出てくる予定じゃなかったんだが……

高津戸へ

「大石さん」

「どうしました？」

「孫の財布のことなんだが……どう思う？」

雀荘で騒いだ次の日、犬飼寿樹の財布が高津戸で発見されたという報告を受け、俺は急いで興宮署へと向かった。そしてその財布が本物であることを確認し、高津戸へ孫の捜索に向かうことにしたのだった。

「どうとは？」

「俺は……何か出来すぎてる気がするんだ。まるで誘われているような……」

孫を誘拐し建設大臣を脅迫するような連中が、こんな素人じみたミスを犯すだろうか？
まるでわざと財布を落とし、こちらを高津戸へ誘いこもうとしているような……
そんな不安を感じていた。

「なっはっはっは！そんな馬鹿な、考えすぎですよ」

大石さんは俺の不安を笑い飛ばす。

「赤坂はどう思う？」

赤坂にも同じ質問を投げかける。

「……私も大石さんと同じです。やはり考えすぎなのでは？」

やはりただの考えすぎなのか？

この不安は晴れることはなかった。

ダム工事現場に近づくにつれ、雛見沢住民の怒号が聞こえてきた。

「赤坂、顔隠しておきな」

俺に促されて赤坂は顔を隠す。

その直後

雛見沢ダム建設反対！！

今すぐ雛見沢から出て行け！！

南無阿弥陀仏

雛見沢住民の怒号が辺りを包み込んだ。

車はどうにかして前に進もうとするが、住民達が座り込みをしており、

思うように進むことができなかった。

「大石さん、少しここで待っていてくれ！！俺が道路に座ってる連中を退かしてくる！！」

「分かりました！！お願いします！！」

かろうじて聞こえる大石さんの返答に頷き、車から出た。

「ハイハイ、そこまで！！車が通れねえから道路から退けてくれ」

「警察は抗議行動も許しちゃくれないのか？」

「そんなことは言っちゃいけないだろうが。こっちはただ、道路のど真ん中に座り込まれると車が通れなくて困るって言うてるだけだ」

その後もなんとか説得させてここから退かせようとするが、なかなか聞き入れてくれず、話は平行線のままだった。その時

「どうしたのですか？」

一人の少女が現れた。

ここはいつもと同じ世界のはずだった。

もう一度赤坂に合うために、耳がおかしくなりそうになるダム現場にわざわざ来た。

住民達が道路に座り込み、抗議行動を行なっている。だが、そろそろ大石が現れ、彼等は退けさせられるだろう。そう思い道路を見ると、丁度いいタイミングで大石の車が訪れ、立ち往生している所だった。すぐに大石が車から出てきて、住民達を退けさせるだろう。

そう、何も変わらない。

それが運命だから。

だが、その考えは、一瞬で打ち砕かれる。

車から出てきたのは大石ではなく、男物のスーツに身を纏った若い女性だった。

誰だ？あの女は？

百年以上生きてきたが彼女は一度も見たことがない。

「羽入居る？」

「はい、居ますのです」

私の呼びかけに角の生えた少女が答える。

彼女は羽入。

共に長い時を生きている大切な家族であり、

難見沢で信仰されている神、オヤシ口様でもある。

ちなみに彼女は霊体のようなもので、私以外には見ることも話すこともできない。

「羽入、あの女に見覚えはある？」

「……いいえ初めて見ますのです。それにあの顔は一度見たら必ず記憶に残っているはずなのです」

羽入の言葉を聞き、もう一度彼女を見る。

顔立ちはかなり整っており、スタイルもいい。

特に胸に関しては……何を食べたらああも大きくなるのだろうか？

一度聞いてみたいものだ。

……考えが逸れた。とにかく、あれほど印象深い人物を

忘れていたとは思えない。

……確かめてみよう、彼女が本当に私達が知らない人物なのかを。

私は彼女に向かって歩き出す。

彼女がもし本当に私達の知らない人物のなら、

運命を打ち破る鍵となるかもしれないからだ。

羽入は期待するなと言っただろうけど、

今回ばかりは期待せざるおえないだろう。

彼女が運命を打ち破る鍵となることを願いつつ

「どうしたのですか？」

私は声をかけた。

「……子供？」

何故こんな場所に子供が？

この場所には余りにも似つかわしくない存在に

少し混乱するが、直ぐに冷静さを取り戻す。

「梨花ちゃま！いえいえ、この分らず屋の警察官

とちよっと話していただけですよ」

「あ、あのなあ……」

あまりの言われように最早苦笑いするしかない。

ふと、彼女がこちらを見つめていることに気が付いた。

そしてその瞳には俺を探っているようなそんな印象を受けた。

「貴方は誰なのですか？」

彼女のいきなりの言葉に少し呆気を取られる。

初めて会う人間に貴方は誰？と聞かれれば、

誰もが同じ反応をするだろうが……

「つい最近、興宮署に異動になった坂戸宮時雨だ。

君は？」

「古手梨花なのですよ。よろしくなのです。にば〜」

「古手梨花、古手梨花……ああっ！古手神社の娘さんか！」

彼女の事を思い出し、ポンと手を打つ。

「そうなのですよ。僕を崇めないとオヤシロ様に崇られてしまうのです」

「そりゃ怖い。崇られないように拝んでおきますかね」

梨花の言葉におどけて返す。

話には聞いていたが、実際に会ってみると

彼女が村のマスコットと言われるのがよく分かる。

百聞は一見に如かずとはよく言ったものだ。
だが、それと同時に彼女の全てを諦めてしまったような瞳が気になった。

その後梨花が周りを説得してくれ、道路に座り込んでいた住民は退けてくれた。

車が近くに居た梨花とすれ違った時、

梨花がこちらに向かって何かを言っていた。

何を言っているのかは分からなかったが、

どうやら赤坂に向かって言ったようだ。

赤坂の顔色が変わった。

赤坂はその後暫く、何かを考えるかのように目を瞑っていた。

「あそこか？」

「ええ、営林署の器材倉庫です。とはいえ、夏にしか使われてませんけどね」

俺達の視線の先には営林署の器材倉庫があった。

高津戸へ入った俺達は途中で入江先生とすれ違い、

不審に思った大石さんがもう少し調べてみようと言い出し、

器材倉庫までやってきてみると、そこには見慣れないワゴン車が止まっていた。

「当たり前……だな」

「でしょうねえ。んっふっふっふ!」

大石さんは不敵な笑みを浮かべる。

「赤坂、銃を撃った経験は?」

俺は銃の状態を確認しながら、射撃経験を聞く。

「訓練でなら……大石さん達はどんなんです?」

「私も訓練だけです。それもずいぶんと昔の話です」

「坂戸宮さんは?」

「俺は……あるぜ。何回もな」

赤坂の質問にそう答え、シリンダーに銃弾を装填していく。

「さて、行きますか!」

俺達は車から出て器材倉庫へ歩いていく。

空からは大粒の雫が降り注いでいた

死闘（前書き）

小此木の言葉が標準語に……どうしてこうなった……

死闘

「こんにちわあ〜！ちょっといいですか〜！」

大石さんが荒々しく扉を叩く。

少しした後、一人の男が扉を開けた。

「これは大石警部、一体どうしたんです？」

「それがちょっと雨に降られちゃいました。

今日は晴れだって天気予報で言ってたんですけどねえ。んっふっ

ふっふっ」

「ハハハ、それは災難でしたねえ」

「ちょっと失礼するぜ」

愛想笑いする男を押し分け、倉庫へ入る。

中を見渡すと、カップ麺や弁当のゴミが散乱していた。

「黒……か」

ゴミを見て寿樹がここに居たことを確信する。

その直後、大きな物音が聞こえ振り返ると

あの男と大石さんが取っ組み合いになっているところだった。

「大石さん！今、そっちに　ッ！？」

大石さんを助けに向かおうとするが、突然放たれた蹴りに阻まれる。

「へえ……今のを避けられるとは思わなかったぜ」

男は不敵な笑みを浮かべる。

「舐めんじゃねえ。あれぐらいの蹴り、目え瞑っても避けられる」

そう言っつて男を睨みつける。

……正直、俺はこの男には勝てる気がしない。

腕っ節にはそれなりに自信はあるし、場数だつて踏んでいる。

そこらの犯罪者には遅れは取らないつもりだ。

だが……

(クソツどうやっても勝てる気がしねえ……)

自分と相手の実力差に内心舌打ちする。

間違いなく相手はプロだ。それもこの男は

その中でもトップクラスの實力の持ち主だろう。

背中に汗が伝うのが分かる。

「どうした掛かつてこないのか？」

男は掛かつて来いと言わんばかりに手招きをしてくる。

「クソツ舐めんなあああ!!」

それを見た俺は殴りかかる。

自分がああ男に威圧されていたことを悟られないために

「チツ手間取らせやがって」

男　小此木は目の前に倒れている大石に舌打ちする。
この老練な刑事が公安の新米と共にここまで来ることは想像できたことだったが、自分とここまで渡り合うとは思っていなかった。

（俺の腕も鈍っちゃったかな）

そう考えて苦笑いする。

そう言えば最後に命を賭けた戦闘をしたのは何時だったか？

ここ数年は裏方に回り、正面からぶつかり合うことはなくなっていった。

その為、感が鈍っていたし、訓練も怠っていた。それが今回ただの刑事に遅れを取りそうになった原因だった。

そろそろ人質を連れて逃げている仲間と合流しなければ
と思い立ち上がる。

その時

「ゲハッ!!」

倉庫の中で自分の仲間と戦っていた女性刑事が中から吹っ飛ばされてくる。

地面に叩きつけられ地面を転がる。

そしてそれを追うように、倉庫から仲間である夜形が出てくる。

「ク……ソがあああ!!」

彼女は咆哮を上げながら、立ち上がるうとしていた。頭からは血を流し、スーツは所々破れている。そして右腕は不自然な方向に折れ曲がっていた。そんな状態でもまだ戦おうとする彼女に感心する。

「ハッ！まだ立とうつてののか？いい加減に負けを認めろよ」

「ざけんな！！まだ……終わってねえ！！」

女性刑事はふらつきながらもなんとか立ち上がる。

夜形は愉快そうに顔を歪める。

「おい、夜形何時までも遊んでんな。

さっさとケリつける」

「まあそう言つなよ小此木。……久しぶりなんだよ、俺とここまでやりあえる奴は」

夜形は充実した笑みを浮かべる。

彼は彼女との戦いを心から楽しんでいた。

自分にも多少なりとも戦士としての矜持はある。

だからこそ、小此木には彼の戦いを邪魔するということ無粋な真似は出来なかった。

「……分かった、もう止めねえよ。
あんまり遊びすぎんなよ」

もう一人の仲間と合流するため、山に向かって走り出した。

(ああ、楽しいなちくしょう!!)

自然と笑みが浮かぶのが分かる。

自身の体には傷ができ、汗をかいていたが精神は高揚し、疲れや痛みは一切感じない。あるのは歓喜のみ。

目の前には腕が折れているにもかかわらず、立ち上がる女性刑事が居た。

目は虚ろで息は荒く意識があるかさえ怪しい。

「どうしたもう終わりか？」

そんな彼女に問いかける。

まだこの時間が終わって欲しくなかった。

もっと楽しませて欲しかった。

頼む……まだ倒れないでくれ!!

「……………」

ゆらりと彼女の体が動く。

ああ、もう終わりか。

そう落胆した瞬間

俺は宙を舞っていた。

地面に叩きつけられ、初めて自分が殴られたということが理解できた。

「グッ！？ククク……何だよ、まだやれんじゃねえか」

俺はすぐに立ち上がり臨戦態勢を取る。

すぐ目の前には彼女が接近してきていた。

彼女の顔目掛けて拳を振るう。

彼女は首を傾げるだけでそれを避け、ストマックブローを叩き込んできた。

「グ……ゲホッ！！」

胃が逆流しそうになるのを必死で抑える。

それと同時に意識が遠のいていくのが分かる。

「まだだ……ま……だ……」

その言葉を最後に俺は意識を手放した。

「う……」

気が付けば俺は地面に倒れていた。

何があったのかを確認するために体を起こそうとする。

「グ！？ガアアアア！！」

だが右腕に激痛が走り、地面に倒れる。

右腕を確認してみると、不自然な方向に折れ曲がり、血が滴り落ちていた。

「折れて……やがる……」

自分の腕の状態を確認して舌打ちする。

そして痛む体を引きずり、なんとか近くの木まで辿り着く。

木に左手を付きなんとか立ち上がり、辺りを見渡す。

すると、すぐ近くにあの男が倒れていることに気が付いた。

「俺が倒したのか？」

この男との戦いの記憶は途中から途切れている。

だから俺が倒したのか、それとも他の誰かが

倒したのかは分からない。

「そうだ……孫を助けないと」

少しの間、思案に耽っていた俺は本来の目的を思い出し、

山へと向かった。

「居たー！！」

山道をふらつきながら歩き、赤坂達が見える位置まで来れた。

どうやら赤坂が孫の保護に成功したらしいが、犯人の一人に肩を撃たれてしまったようだ。

「……やってみるか」

少し考えた後、ガンホルダーからニューナンプを抜く。

幸いこちらには気づいていない。

撃つなら今しかないだろう。

右手に銃を握らせる。

激痛が走るが、歯を食いしばって耐える。

本当なら左手で撃つべきなんだろうが、利き腕ではない方で撃つても当たる可能性は低い。

そのため痛みを堪えるしかなかった。

「……フウ」

ゆっくりと息を吐き集中する。

そして、片方の男の銃を狙い

引き金を引いた

銃弾は男の銃に当たり、銃を弾くことができた。そしてそれに合わせて大石さんが加勢に入り、

もう一人の銃を奪い取って赤坂と孫を助け出すことに成功するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9524z/>

ひぐらしのなく頃に 異端の刑事

2012年1月11日00時58分発行